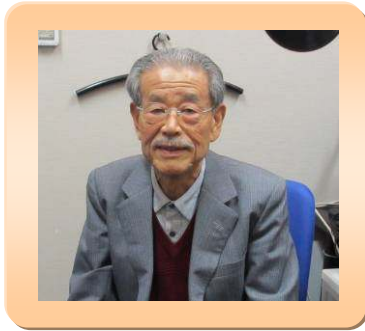


『私の戦争体験』

(八尾への学童疎開)

お話: 植野 禎造さん(山本町南在住)

(平成 26 年 5 月 6 日 FM ちゃお放送)



司会

今回は、昭和 19 年 9 月に植野さんが学童疎開で大阪から八尾に来たときのことについてお話しいただきます。

植野さん

当時、私は大阪市内に住んでいて、上本町国民学校の 4 年生でした。だんだんと戦争が激しくなってきたので、子どもたちが学校単位で地方に疎開することになりました。私の学校では、4 年生から 6 年生が学年ごとに八尾のお寺に行くことになり、私は本町にある慈願寺というお寺に行きました。

司会

疎開するにあたってご家族とはどういった話をされましたか。

植野さん

私は、7 人兄弟の末っ子だったこともあり、疎開で親と離れるのが嫌で、父に「行きたくない」と言っていました。父はその頃、病床にありましたが、「治ったら迎えにいつてあげるから、行っておいで」と私をなだめてくれ、泣く泣く行くことにしました。

実際、疎開のため親元を離れると本当に寂しかったです。最初の頃は、布団に入って「帰りたい」と泣いている人もいました。大きな声で泣くと恥ずかしいから、布団の中でしくしくと泣いている人もいました。

司会

大阪市内から八尾へはどうやって来られましたか。

植野さん

ダイキと呼ばれていた大阪電気軌道の電車で来ました。今は近鉄になっています。八尾駅まで電

車で来て、八尾駅からは歩いて慈願寺へ行きました。そのときの八尾の印象は、畑ばかりですごい田舎に来たように感じました。

司会

慈願寺には、何名くらいの子どもたちが来ましたか。

植野さん

4 年生が 30 名くらいいたと思います。

司会

慈願寺での生活はどのようなものでしたか。

植野さん

第一に困ったのは食べ物のことです。代用食として、例えば、朝ごはんはおかゆさんみたいなもの、昼ごはんはふかした芋を二つ、晩ごはんは豆や芋が混ざったお米をいただいていた。今のようになんでも食べることはできませんでしたが、みんな辛抱していました。標語として、「欲しがりません、勝つまでは」という言葉もあったので、我慢していました。

稲刈りの時期には、みんなで食べるためのイナゴ採りに、田んぼに行ったりもしました。

お寺では、あまり勉強をしたような記憶はありませんが、童話集のような本がたくさんあって、私は本が好きだったのでよく読んでいたように思います。

司会

八尾に疎開している間に大阪市の実家へ戻ることはありましたか。

植野さん

10 月の頃だったと思いますが、姉が私を迎えに来てくれました。私は家に帰れると思って喜びましたが、迎えに来てくれたのは父が亡くなったためでした。それでも、家族と会えることを嬉しいと思っただし、家に帰るとホッとしました。葬式が終わると、またすぐに、お寺に戻ったと思います。

そのほかにも、私の 6 年生の兄の話になりますが、3 月 14 日に卒業式があるので、3 月 12 日に実家へ帰っていました。ところが、翌日の夜に、大阪市内で大空襲があり、命からがら逃げたそうです。私の家族は、学校のグラウンドに逃げこんでなんとか助かりました。

私自身は、八尾で直接、空襲にあうことはありませんでしたが、大阪大空襲があったり、八尾には大正飛行場があったことから、八尾も危ないということで、今度は八尾から島根県へ疎開することにな

りました。島根県への移動中に、機銃掃射にあい、給食のおばさんが撃たれて亡くなりました。本当に悲惨でした。

司会

終戦の日は、島根で迎えられましたか。

植野さん

終戦のことを私自身はあまりピンとこなかったのですが、お寺の境内で、大人たちが、「戦争が終わった、戦争が終わった」と言っているのを聞いて知りました。

その後は、列車がすぐには通らなかったこともあり、11月になってようやく大阪に戻ることができました。戦後も、食べ物も十分でなく大変な生活を送っていました。

司会

最後に、戦争を体験され、いろいろな思いをされたと思いますが、次世代に平和の大切さを伝えるために、メッセージをお願いします。

植野さん

今の日本は、平和で食べ物やモノも十分にありますが、世界では紛争が起きているところがあります。戦争は絶対にあってはならないことですが、現実はそのようになっていないということを頭の隅にでも置いといてもらいたいです。

司会

ありがとうございました。